

序文

昭和女子大学国際文化研究所では、日本・ベトナム共同で、中部ベトナムの古都ホイアンの町並保存事業を推進しております。その一環として、1993年以来、考古学班を編成し、建造物の修復、保存およびホイアンの町並みの形成史解明のための発掘作業を今日に到るまで継続してきました。その成果は大きく、かつ多岐にわたりますが、此度、1993年から1995年にいたる3年間の成果を、ここに報告書としてまとめ、刊行する次第です。

このホイアン周辺には、ホイアン前史として、わが国の弥生文化に酷似する、稲作、鉄器、カメ棺をもつサーフィン文化があります。時代もほぼ同じです。また、2世紀から15世紀にわたる、ヒンドゥー教の祠堂を伴うチャンパ文化もきわめて興味深いものがあります。

このような風土の中に古都ホイアンがあり、その旧市街地の保存地区において発掘作業が行われました。この調査で17世紀代の溝や川の跡が検出されると共に、16世紀から18世紀代の中国陶磁器、17世紀後半の日本陶磁器（肥前磁器）、17世紀のタイ陶磁器、16世紀末から20世紀代のベトナム陶磁器類が出土しました。また、興味深いこととして、溝状遺構の下層から中層にかけて16世紀末から17世紀前半の中国陶磁器が、また、その上層から17世紀後半の肥前磁器の出土が確認されました。

以上のことから、ホイアン旧市街地区でのひとびとの居住開始は、出土した陶磁器から見て16世紀末以降であることが確認されました。また、これらの陶磁器類から、ホイアンが交易都市であったことが再確認されると共に、17世紀前半の中国陶磁器や17世紀後半の肥前磁器が多量に出土したことから御朱印船の寄港、日本人町の形成など日本・ベトナム交流史の一端を見ることが出来ました。さらに従来、年代が不明であったベトナム焼締陶器が、共伴した中国陶磁器や肥前磁器の時代から初めて年代設定が可能になりました。これらの陶磁器類に対して理化学的分析による調査、研究も開始し、その成果の一部や、ホイアンの地形に関する予備調査の結果など、考古学における自然科学の活用を示す報告も収録することが出来ました。

このような考古学調査で、各種、各時代の陶磁器類が出土しましたが、同時並行して作業が進められていました「チャンフー80番」の民家は、修復、保存が完了し、貿易陶磁博物館として公開、利用されることになりました。ホイアンの町おこしにとって貴重な存在となるでしょう。

長期にわたる調査のため、調査隊と地元の方々との交流は深まり、それぞれ良い思い出をのこすことが出来たと思いますし、また地元における文化財に対する理解、保護の認識も深まったように思います。

この調査、研究には、ハノイ国家大学、ベトナム考古学研究所、ホイアン市遺跡保存管理センター、クアンナム博物館など多くの公的機関の協力を受けています。本調査報告書は、日本・ベトナム共同調査、研究の大きな成果として位置付けたいと思います。

1998年3月

昭和女子大学大学院教授
櫻井 清彦